

# 指導記録から見た教師の指導意図について

吉野 賢吾

指導記録に教師が残したコメントを記入し、それを母親に読んでもらうことで母親支援につながるものが分かった。また教師が記入したコメントを整理、検討することで、教師の指導意図が見えてくるのではないかと考え、昨年は幼稚部入学1年目の時期の指導について報告した。今回は幼稚部入学2年目3年目の時期の指導における指導意図について検討した。指導意図は目の前の子どもの姿や育てたい力等に依じて指導意図は変わっていくということが改めて確認できた。

【キーワード】 指導記録 指導の意図 母親支援

## 1. はじめに

昨年、指導記録を通した母親支援について報告させていただいた。指導記録に教師がコメントを記入し、そのコメントを母親に読んでもらうことで母親の意欲的な指導への参加につながったことが分かった。また、教師が記入したコメントを整理することで幼稚部入学1年目の子どもたちへの指導意図について見直すことができた。しかし、幼稚部入学2年目、3年目の指導記録のコメントについては、数の比較は行ったがコメントの内容等については検討が不十分だった。

幼稚部1年目では子どもの言葉の理解や言葉を受け取る姿勢等、受容面に重点を置いた指導を行っていた。また、目の前の子どもの姿について肯定的に解説したり、教師が子どもにどのようなことを要求したりしているのか、どのような力を育てようとしているかについて具体的にコメントを残し、母親に伝えようとしていた。幼稚部入学2年目、3年目では子どもの様子は変わってくる。そのため、教師が指導記録に残すコメントも子どもの成長に応じて変化し、そこから見える教師の指導意図も質的に違うものになってくると考える。

## 2. 目的

指導記録に記入した教師のコメントを整理、検討することで、それぞれの学年、とくに幼稚部入学2年目、3年目の子どもたちにどのような指導意図をもっていたのかについて明らかにする。

## 3. 方法

### (1) 対象学級

男児2名、女児3名、計5名の学級で、平成20年に本校幼稚部に入学し、平成22年度に修了した。人工内耳装用幼児1名の他、全体的に聴覚をよく活用し、読話も併用しながら音声言語でのやりとりを楽しむ子どもたちであった。母親のうち1名が聴覚に障害のある母親だった。

### (2) 指導記録

幼稚部入学後の1学期末から母親に指導記録をとってもらうことにした。聴覚に障害のある母親にも担任の話しかけや働きかけをより理解してもらうためにも、逐語的に記録をとってもらった。放課後、担任が指導記録を読んで、指導意図の説明が必要と思われる部分や、子どもの発言の評価について赤のボールペンでコメントを記述した。

### (3) コメントの整理

教師はコメントを、幼稚部入学1年目（以下幼1）の1学期末から幼稚部修了までの間、ほぼ毎日記入した。そのためコメントの数はかなりの数になる。指導記録をとり始めたのが幼1の1学期末であったので、1学期の終業式までの9日間に合わせ、入学2年目（以下幼2）、3年目（以下幼3）の1学期の終業式までのそれぞれ9日間の教師のコメントを全て書き出し、その数と種類について比較検討する。また指導記録に教師が記入したコメントの内容についても検討する。今回はとくに幼2幼3に焦点を当てることとする。

#### 4. 結果と考察

9日間のコメントの総数は表1の通りである。

表1 3学年の9日間のコメントの総数

	幼1	幼2	幼3
コメントの総数	142	84	63

教師が記入したコメントには、教師からの働きかけや言葉かけに関するものがあった。その内容に応じて「言葉の理解」「言葉の拡充」「口声模倣」「指導意図の具体的解説」「子どもの姿の解説」に分類した。「言葉の理解」は、子どもの言葉の理解につながることをねらった働きかけに対するコメントである。「言葉の拡充」は、子どもの語彙の広がりやねらった働きかけに対するコメントである。「口声模倣」は、子どもに口声模倣を誘う際、どのようなことに留意したかについてのコメントである。「指導意図の具体的解説」は、教師の働きかけの意図について、どのようなことをねらったのか、どのような子どもの姿を期待しているのかについて詳しく説明したコメントである。「子どもの姿の解説」は、母親が教室の後ろから見ていたのでは気がつきにくい子どもの行動や気持ちの動きについて説明したコメントである。各学年毎に分類した結果は表2、表3の通りである。

表2 分類の結果1

	言葉の理解	言葉の拡充	口声模倣
幼1	17	17	15
幼2	5	16	1
幼3	1	7	1

表3 分類の結果2

	指導意図の具体的解説	子どもの姿の解説
幼1	21	14
幼2	21	8
幼3	3	6

表2をみると、幼2では「言葉の拡充」の数が多くなっている。幼1とほぼ同じ数である。「言葉の拡充」のコメントは、幼1幼2ともに教師の発言の中の単語や言い回しに下線を引き、「使っていきましょう」と記入したものがほとんどであった。

〈コメント記入例1：幼2〉

子どもが五十音表をお風呂の壁に貼ったという内容の発言を受けて、「お湯を裏につけるとペタって

くっつくんだってー。不思議だね〜。」と教師が発言した。「不思議」という言葉を「不思議っていうのは〇〇〇ってことだよ」と言葉で幼児に説明するのは難しい。そのため「不思議だね〜」の部分に下線を引き、「使っていきましょう」とコメントを残していた。

〈コメント記入例2：幼2〉

七夕の笹とりに行った様子を子どもたちと思い出しながらやりとりをしていた際、「先生が切りました。ギコギコ。あっ、危な〜い！みんなよけました。」と教師が発言した。笹とりで教師が竹を切った様子は実際に子どもたちが見て頭の中にしっかりイメージできていることであるため、聞き慣れない言葉でもイメージと結びつくと考え、「よけました」の部分に下線を引き「使っていきましょう」とコメントを残していた。

「使っていきましょう」というコメントは母親にそれらの言葉や言い回しを意図的に生活の中で使ってもらおうという意図を込めて記入したものである。母親とのやりとりの中で子どもが新しい言葉に触れ、母親が意図的に使い続けることで子どもの中になじんでいき、意味と結びつき獲得されることを狙ったコメントである。そして母親が指導を見ながら、教師が子どもに馴染ませようと考えている言葉に敏感になってもらいたいという意図をもって記入したものである。幼3になると、母親はそのような言葉に敏感になり、教師がコメントを残さずとも授業を見ながらメモをとる姿が見られるようになっていった。そのため幼3での数が少なくなったものとする。このように、幼1の段階から母親に教師の指導の意図等をコメントを通して伝えていったことで、母親自身がコメントを読まずとも教師の意図を推測し汲み取るという姿につながり、教師が意図的にコメントとして残す必要がなくなったものとする。その結果、表1に見られるように学年が上がるにつれてコメントの数が少なくなっていったことにつながったものとする。

表3では、幼2で「指導意図の具体的解説」が多くなっている。幼1では、真似をすることが言葉の獲得につながることや、「最後まで聞いてから行動

#### 4 指導記録から見た教師の指導意図について

しまししょう。お母さんたちも最後まで聞かせるように心がけましよう」等、受容面に関するコメント等が目立ったが、幼2では質的に異なるコメントを残していた。

〈コメント記入例3：幼2〉

水着を話題にしての話し合いで、子どもたちが各々「パンツみたいなの」とか、「おなかが みえる みずぎだよ」,「オレンジじゃなくて ピンクなの」,「スカートが ついてる」など、自分の水着について発言していた場面の例である。子どもたちは自分の水着に対してしっかりとイメージをもっていると判断し、「Aの水着は青で、パンツみたいな水着だよ。」「Bの水着は上と下に分かれた水着だよ。上が青で下が黒だよ。」と教師が発言し、子どもに文単位で口声模倣を誘い、自分の水着について説明してもらった。この部分について教師は「自分の水着について言葉で説明してもらいました」とコメントを残していた。

〈コメント記入例4：幼2〉

その日の予定の話題で、「今日、お弁当を食べ終わったら、盆踊りの練習をするからね。」という教師の発言を聞き、その内容をイメージできるがうまく言えない子どもがいた。子ども一人一人に「盆踊りの練習をするよ」と口声模倣をしてもらったが、一人の子どもが「ほんの おどりの・・・」という言い方になってしまい、その子どもに何度か繰り返し練習してもらった。この部分について教師は「いろいろなことに自分で気をつけられるようになってきたので、助詞の有無、位置なども自分で気をつけてもらおうと考えました」とコメントを残していた。

コメント記入例の3と4は、どちらも口声模倣を誘っている場面である。そのため、「口声模倣」についてのコメントとして分類してもよいはずだが、子どもが自分の頭で考えたことを言葉で説明する力につなげたい、日本語の文法になじませたいという「指導意図の具体的解説」に分類した。この時期の子どもたちは口声模倣の習慣はほぼ身についていたこと、文レベルの口声模倣の力を育てようという指導意図よりも、子どもの表出面も育て、単語レベルのやりとりだったものを文レベルでのやりとりにし

ていこうという教師の指導意図が伺える。このように幼2の時期は子どもの表出面や、日本語の文法に関するコメントが目立った。

教師のコメントには、教師の働きかけや言葉かけ以外に、子どもの反応に対する評価に関するものがあった。その内容に応じて「受容」「表出」「口声模倣」「やりとり」「思考」に分類した。「受容」は教師や友達の話を受容する際の態度について評価したコメントである。「表出」は子どもが表出した内容や言葉や文について評価したコメントである。「口声模倣」は模倣しようとする態度や、実際に模倣したことについて評価したコメントである。「やりとり」は子ども同士がやりとりしている様子や内容について評価したコメントである。「思考」は子どもが考えたことや、子どもの考え方について評価したコメントである。その分類の結果は表4の通りである。

表4 分類の結果3

	受容面	表出面	口声模倣	やりとり	思考
幼1	23	22	2	7	4
幼2	8	12	1	5	7
幼3	6	25	0	6	8

表4をみると、幼2幼3ともに「表出面」の評価が多くなっている。幼1で子どもの受容面に焦点を当てて指導してきたことで、子どもの頭の中に「話されて分かる言葉」が増えていき、それが「自分で言える言葉」になっていった。幼2の時期は言葉で話したことが母親や先生に伝わることを実感し、表出意欲が高まる時期であることが伺える。

〈コメント記入例5：幼2〉

Bの誕生日が7月12日日曜日、誕生会が10日金曜日ということのを頭の中で整理しきれず、混乱した子どもがいた。その時、Cが「カレンダーをみたよ。7が12にちは にちようびだよ。」と発言した。このCの発言に対して「わかりやすい説明です」と教師はコメントを残していた。

〈コメント記入例6：幼2〉

コメント記入例5の場面の続きで、教師に「7月12日は日曜日だったの？ホント？」と確認され、Dが混乱して言いよどんでいた時、Dの代わりにAが「ほんとして いったら わからない。」と発言した。

このDの発言に対して教師は「この心情を言葉にできたのは、とてもいいですね」とコメントを残していた。

コメント記入例5でのBの発言は、これまで毎日カレンダーを見て日にちや曜日を確認してきた経験から出てきたものである。またBは日頃、文で話すというよりも、単語で発言することが多かったため、理由を自分から文で述べたところをプラスとして評価している。コメント記入例6でのAの発言は「わからない」という自分にとってマイナスなことを表出したものである。日頃Aは自分にとってマイナスなことを発言することが苦手な子どもであった。そのため、自分からこのように発言した心情面をプラスとして評価している。子どもが積極的に言葉で表出してくることを、教師が肯定的に受け止めることで、子どもの表出意欲をより高めようという意図をもって子どもに接していたことが伺える。

〈コメント記入例7：幼3〉

話し合いの場面で、Aが毎日早起きをしていると発言した。教師から「そんなに早起きなら、Aは漁師になればいいじゃん。」と言われ、Aが「ぼくはりょうしになる」と応じた。Aの発言をうまく受け取れなかったDから「ヨッシー？え？なに？」と質問され、Aが「りょうしさんっていうのはさかなをつるひとだよ」と説明した。このAの説明に対して教師は「いい説明ですね」とコメントを残していた。

幼3では自分の知っている言葉を、他の言葉で説明する力を身につけてほしいと考えている。そのため、Aの説明をプラスの評価として母親に伝えている。子ども同士が質問し、答えているのであるから「やりとり」の評価のコメントを残すのが妥当かも知れないが、この時期の子どもたちはこの程度のやりとりの力はすでに身につけていたため、その部分ではなく「表出」の評価を残したものと考える。

## 5. おわりに

以上のように、取り上げることができたコメントはほんの一部分だが、幼2幼3の指導記録から教師の指導意図を探ってみた。先述の中で、「口声模倣のコメントを残すこともできるが、指導意図の具体的解説のコメントを残している」、「やりとりの評価を残すことができるが、表出面の評価としてコメントを残している」ということが見られた。教師の働きかけには単に一つの指導意図が含まれているのではなく、いくつもの意図が含まれているということが伺えた。

指導記録のコメントを整理することで、目の前の子どもの姿に応じて指導意図は多様であるという、ごく当たり前のことが明らかになったにすぎない。今回、指導記録を見直すことで自分の指導を振り返ることができた。そして改めて「教師の働きかけには全て指導意図がなくてはならない」という先輩の教師から言われた言葉の難しさを実感した。子ども一人一人にねらいがあり、そのねらいを達成するために毎日の指導がある。指導の中で教師は子どもに働きかけていく。その働きかけの一つ一つが子どものねらいを達成するためになされていかなければならない。今後もしっかりと指導意図をもって毎日の指導に当たっていききたい。

〈参考文献〉

- 吉野賢吾（2012）指導記録を通した母親支援について、筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要第34巻、2-6
- 筑波大学附属聾学校幼稚部（1995）『3歳児の指導』、聾教育研究会
- 筑波大学附属聾学校幼稚部（2004）『幼稚部3年間の子どもの姿』、聾教育研究会